原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第二百二十二号

原告団レポート

CO患者――中村春吉さん

昏睡状態で昇坑、二十年の入院生活

裁判勝利で会社の責任を

父親も三川鉱の落盤で殺された

昭和36年地域分会旅行で（後列右端が中村さん）

炭鉱一筋に

「私がここに入居したのは小学一、二年生でしたから、たしか昭和十一、二年ごろだったと思います。まだ社宅は建設中で一区が十棟、二区が十棟ぐらいしか建っていませんでした」と、労災病院に入院している中村春吉さん（昭和七年三月一日生まれ、五十一歳、大牟田市新港社宅二区四棟）の妻ヒサエさんは語る。

うす暗くなりかけた静けさのなかから、秋の冷気が流れこんでくる。かっての社宅のにぎわいをなくした新港社宅の片隅に中村さん宅はある。

夫妻とも新港社宅の盛衰をつぶさにみてきた労働者である。新港社宅は、諏訪川河口の硬埋立地に三川鉱の開鉱（昭和十一年）と前後して建設されはじめた社宅である。

戦中は強制連行されてきた朝鮮人労働者、捕虜のオーストラリア人、イギリス人を寮に収容し、三川鉱に働かせていた。

社宅は三川鉱と港務所に働く労働者と区分され、戦後の一時期は労働者、家族含めて五千人をこえていたという。

三池闘争後、二十数年を経た現在、合理化社宅となり百世帯余りしか居住していない。朽ち果てた社宅は取り壊わされ、半壊の社宅周辺には雑草がおいしげり、虫の声ばかりである。

中村春吉さんは戦後の昭和二十年、三池港務所に下請け労働者として働きにでた。昭和二十三年三月、労働組合の結成、その後の闘いで港務所の社員となった。父親の喜一さんも二十一年に三川鉱に入社したが、二十七年落盤で殺された。四十二歳だった。

ヒサエさんは戦時中、学徒動員として三池製作所で働いた。昭和二十一年、父の働いている港務所にアルバイトで入り、そのまま社員となった。

ヒサエさんの父親は昭和二十八年の合理化のなかで、執ような肩たたきにあい退職した。

苦しい生活

春吉さんとヒサエさんの結婚は昭和三十一年十一月四日だった。翌年、長男の博文さんが生まれ、昭和三十三年には次男の秀男さんが生まれた。

ヒサエさんは母乳が出ず、子供たちはミルクで育った。この当時は小川開の社宅（現在はない。千代町公園の横附近）に、母や弟妹たちと暮していた。

日曜毎に家族が連れだって、買物や動物園、山野に遊びに出かけるのが楽しみの一家だった。春吉さんは病気知らずの頑健な体の持ち主であり、陸上競技の選手で、職場分会対抗の駅伝には欠がさず走っていた。

三池闘争中は、小川開社宅分会から三川鉱裏門のピケについた。

昭和三十六年三月、現住所に移転する。その年の十二月、春吉さんは三川鉱へ希望配転し、乙方開発仕繰工となった。

「私にはなんの相談もせず、三川鉱に下がることを決めてきたんですよ。三池闘争のあとで差別され、賃金がダウンして生活は苦しかったです。それに三番目の子が来年五月に生まれることがわかっていましたから、また生活費がかさむと思って決めたんでしょうがね。私は、苦しい生活になれているし、我慢するから断ってきてといったのですが、駄目でした。それから、毎日出勤して帰ってくるまでが不安でした」

三川鉱に入坑しても差別は続いた。収入の少ない、現場環境の悪い個所に配役された。

「あんなに強い体だったのですが、坑内で働くようになってから、駄目になってしまいました。病気ばかりするようになってですね」

爆発前の九月から十月にかけて喉を痛めて休んでいたが、十一月は正月前の給料になるからといって、出勤しはじめた。

大黒煙の下

「十一月九日は土曜日でした。二番方に出勤したあと、私は明日の日曜日、幼稚園のバスハイキングがあり、参加することにしていましたので、三川町五丁目の知り合いのパーマ屋さんで、パーマをかけていました」

「近くでしたけど爆発の音は知りませんでした。帰りのバスの中で、知人とあい三川鉱の坑外施設が爆発したらしいと聞いたのでした。長男は社宅で遊んでいて、まっ黒い大きな煙を見たといってました」

その後、刻々と入るニュースで災害の大きさがわかるにつれ親族が駆けつけてきた。組合へ、天領病院へ、死体の安置されている体育館へと、家族は寒い空の下を走りまわった。

中村春吉さんは、三川鉱三百五十メートル坑道の詰所付近で倒れているのを発見され、翌十日午前九時頃、宮浦鉱から昏睡状態のまま昇坑してきた。天領病院には収容しきれず、上官町の中島外科に入院させられた。

病院ぐらし

昏睡状態で入院してきた中村さんに、酸素吸入、点滴などが昼夜わかさず続けられた。ときおりケイレンがおそい、ベッドで苦しむ。ヒサエさんがおさえきれないときは、同じ付き添いにきている人が手伝ってくれる。

「つらかったですね。突然の入院でしょう。私が付き添いにつかねばどうすることもできず、子供三人つれてベッドの横で寝起きすることになりました」

週1回の外泊で帰宅中の中村春吉さんと奥さんのヒサエさん。新港社宅もしだいに淋しくなるばかりだが、やはり自宅は格別。

「がんからたしなめられました。労災法で前三カ月の平均賃金となっていますが、あのときはどうにかならないのかと思いました」

六歳、五歳、一歳半の子供たちを連れての看病である。ベッドの間にはさまれた、板張りの上での寝起きに、体のあちこちが痛んだという。

「同じ十一・九のCO患者のかたが五人入院されてました。小さい子供たちがいましたので、ずいぶん世話になりました」

ヒサエさんは、当時のつらい病院での暮らしをつい昨日のことのように語る。

「身体の調子がわるくて、二カ月ほど休んでいましたから、労災の給付も安かったですね。月六千円だったと思います。同じ入院している新労の人は一万円こえていましたよ」

「これじゃ生活できんと、愚痴っていたら、井上さんのおばあちゃん」に、子供を連れて参加した。

入院二十年

大牟田市吉野にある三鍊の診療所（旧国立銀水園の前の土地）を買収し、大牟田労災病院が設立された。

昭和三十九年三月から四月にかけて、散在して入院していたCO患者は、ここに転院した。中村さんも中島外科から移った。今年の十一月九日がくれば、入院生活満二十年となる。

ヒサエさんに、生活のすべてがかかってきた。給料袋を見るたびに、ひと月をどう暮らしていけばいいのか、考えれば考えるほど眠れなかった。

昭和四十年から四十一年の二年間は心労のあまり胃潰瘍となり、体重四十キロをわった。しかし、いつまでも、悩んでいても自分がしっかりして、働かなければ子供たちはどうなるのかと思った。

昭和四十二年、最後の申し込みで失対事業に入ることができた。一番下の剛治さんを諏訪保育園にあずけると、自転車で現場にむかう。ヒサエさんは、今も働きに出ている。

中村さんは毎週土曜日に帰宅し、日曜日の昼すぎ労災病院へ帰る。当初、CO患者の入院が圧倒的に多かった労災病院も、二十年を経た現在三十数人しかいない。

メンタルリハビリを中心に、他の労災患者といっしょに治療をうけている。

「晴れた日はゲートボール、落葉掃き、雨の日は体育館でフリーテニス、ピンポンなどをしています」

中村さんは、病院での生活をこう語る。

「一週間の日課表があって、トランプ、囲碁・将棋、レコード鑑賞、時事問題の話しなどがあり、私みたいに週一回帰る人もいますが、月一回の人、全然帰れない人が今もいるんです」

「これといった特別なことはしていないのですが、なるべく体を動かすようにつとめていますが、私たちの体力は、急速に低下していて七十歳ぐらいだといわれている人もいます」

この二十年間、一家そろって外に出かけるとか、食事をとることはなかった。剛治さんにとって父親は物心ついたときから、CO患者で入院している父親像であった。

「私がミルク代に困って三川鉱に下がり爆発にあったと言ったことがありました。それを聞いていた剛治が、じゃあ僕が父さんをCO患者にしたんだねといいましてね。子供たちも、それなりに考えているんだなと思いました」

ヒサエさんは、長い「COのたたかい」に、子供を連れて参加した苦しい日々を思い浮べる。

苦闘を越え

「遺族、患者家族をまえにして、会社の代弁者となり、白を黒という新労の組合長の態度は絶対に許せません。

爆発のとき、救護が早ければ助かる人も多くいただろうし、治療も早く完全にやれば、こんなに多くのCO患者は生まれなかったと思います。爆発が会社の保安サボで起こり、その後の対策を怠っているのですから、その責任は当然負うべきです。裁判は、石にかじりついても勝ちたいですね」

ヒサエさんは、この二十年の苦しみを裁判にかける。

中村さんが夕食後に飲む薬を、テーブルの上にならべる。赤、青、白のカプセル、粉薬など九種類もある。

「内臓が悪くなってしまい便秘がひどいんです。どうかすると、一週間に一回しかなく、腹がはって苦しくなります。これだけの薬を飲まないと、今も駄目なんですよ」

中村さんは人にいえない苦しみをかかえ治療を続けている。治療は、これ以上悪くならないためのリハビリであり、歳をとるにしたがって余病の併発もある。

「入院生活はこれからも続きますが、裁判で三井の責任をはっきりさせてもらいたいものです」

外は闇となった。外灯のあかりの中に、玄関前のせまい畑に植えてある畑運根が揺れている。子供たち三人は、すでに成人し働きに出ている。孫も一人できた。やがて、じいちゃん、ばあちゃんといわれる日も遠くはない。

中村さん一家にとって、これまでの苦闘をこえてきただけに、裁判での勝利の喜びを、みんなでかみしめたいという切なる望みでいっぱいである。